

北海道細石刃石器群のキャンプサイトにおける骨角加工の実態

— オルイカ 2 遺跡の事例から —

鹿 又 喜 隆

1 はじめに

細石刃は後期旧石器時代に広く隆盛した道具である。日本では、北海道を除けば、後期旧石器時代終末に主として認められる。細石刃の特徴は、骨角製の柄に嵌め込まれ、組み合わせ式道具として、狩猟などに使用されたことである。日本列島は酸性土壌であり、その柄となる骨角器は埋没中に腐ってしまうため、未だ出土していない。そのため、骨角器の存在を何らかの方法で証明する必要がある。その骨角器を製作するために使用された道具が彫刻刀形石器であるが、時には専ら皮革加工に使用されることもあり、彫刻刀形石器の出土だけでは骨角器の存在を裏付けたことにならない。そのため、個々の遺跡において骨角加工があったか否かを間接的に使用痕分析から実証する必要がある。骨角加工は、石器が多数出土するベースキャンプ（中核遺跡）で主に行われることが徐々に分かってきている。

北海道における細石刃石器群の機能研究事例は、少ないながらも少しずつ増加している。しかしながら、北海道の細石刃石器群は、本州から九州に至る地域に比べて、2倍も長いあいだ続いており、その時間幅に見合っただけの分析事例は未だ確保されていない。約 20,000yrBP（非校正）を遡る初期細石刃石器群の研究では、蘭越型や美利河型の細石刃核をもつ石器群の分析が始まった（藪下 2012、鹿又 2013b）。北海道では初期細石刃石器群の柏台 1 遺跡において、組み合わせ式道具を製作するための技術複合が既に完成されていたことが明らかになった（鹿又前掲）。つまり、北方から日本列島への細石刃技術の流入は、組み合わせ式道具を取り巻く技術複合が完成した状況下で成し遂げられたものと推測される。このように北海道の初期細石刃石器群では、柏台 1 遺跡のような、石器点数が少ないキャンプサイトとして位置付けられる遺跡であっても、骨角器製作が確実に行われていた。

その後の細石刃石器群では、機能研究の事例が少ないながらも、15,000～14,000yrBPの札滑型段階に該当する晩遺跡において使用痕分析が実施された(鹿又 2013a)。晩遺跡では、ひとつの遺物集中地点から細石刃が1000点を越えて出土している。そのような地点が多数確認される遺跡群であり、多くの活動痕跡が重複した拠点的遺跡であると理解される。遺跡内では、細石刃の生産と骨角器の製作が連動して行われている。その他にも、皮なめしといった石器使用活動も明瞭であり、遺跡内での多様な石器使用内容が明らかとなった。そのような遺跡は、短期的居住のキャンプサイトとは性格が異なり、ベースキャンプとして位置付けられる。一方、短期間のキャンプサイトとして位置付けられる遺跡は、出土遺物の点数がベースキャンプの約10分の1以下であり、その規模が小さかったと評価される。また、1カ所での活動内容が比較的シンプルであり、一定数の石器製作活動と、他の何らかの活動が行われた可能性が高い。従来では、石器製作以外の活動が不明確であるため、石器の機能研究が果たす役割が大きいと考えられる。これまで厚真町上幌内モイ遺跡において、分析が試みられているが(高瀬 2008)、明確な石器使用行動の復元までには至っていない。それは、短期的な居住のために、集中的な骨角器製作などの石器使用行動が行われなかったことに起因していると思われる。同時期の本州の細石刃石器群においても、細石刃の製作数が少ない遺跡では、組み合わせ式道具の柄となる骨角器の製作が潜在的である(鹿又 2011)。しかしながら、北海道では、キャンプサイトにおける石器使用行動を復元できるだけの分析事例すら欠けており、その実践が第一に期待される。

そこで、本論では千歳市オリカ2遺跡出土石器の使用痕分析から、遺跡内での具体的な骨角器の製作・加工の活動を明らかにすることを第一の目的とする。最終的には、北海道において、細石刃石器群における遺跡間の使用行動の差異が、どのような活動体系の相違を反映しているのかを考察したい。

2 オリカ2遺跡の概要

(1) オリカ2遺跡の発掘成果

オリカ2遺跡は、北海道千歳市中央2536他に所在する。馬追丘陵の東端に位置し、戦前まで長都沼(オサツトー)、馬追沼(マオイトー)などの大小の沼があった低湿地に面する。この場所は、支笏湖を水源とする千歳川や夕張山地から流れる夕張川などが流入するため、氾濫が繰り返されていた土地であ

表2 オルイカ2遺跡の石器組成

遺物集中	細石刃	細石刃核	細石刃核	彫刻刀	彫刻刀	両面調	エンド・ス	サイド・ス	尖頭器	石刃	二次加工	石核	石斧	合計
		ス	スポール	形石器	ボール	整石器	クレイパー	クレイパー			ある剥片			
LCS-1	102	3	1	6	3	2	7	25	0	0	11	2	0	162
LCS-2	72	1	0	1	2	0	5	6	0	0	5	0	0	92
LCS-3	113	2	6	3	3	2	2	13	0	0	5	1	0	150
LCS-4	149	5	6	5	2	1	2	7	0	0	14	1	0	192
ブロック外	24	0	1	3	0	0	5	4	2	7	9	1	1	57

る。

オルイカ2遺跡は、2002年と2004年の2回、発掘調査が行われ、発掘調査報告書が別々に刊行されている（佐川ほか2003、三浦ほか2005）。旧石器時代の資料は、いずれの調査でも出土しているが、主要な時期は細石刃石器群のものである。最初の調査では、ブロック1（LCS-1）が検出され、2回目の調査でブロック2～4（LCS2～4）が検出された。ブロック3は他のブロックから離れており、最も離れたブロック4とは約80mの距離にある。標高13m程にあり、近隣の旧石器時代遺跡に比べても標高が低い立地である。これらのブロックは、石器の接合関係があり、石器群の特徴も同一のものであることから、ほぼ同時に同じ集団によって残されたものと推定される。

遺跡では、湧別技法札滑型細石刃核からの細石刃生産がおこなわれ、荒屋型彫刻刀形石器やエンド・スクレイパーなどのツールの存在によって特徴づけられる（表1）。層位的には、恵庭a降下軽石（En-a）の上位の風化ローム層から出土している。放射性炭素（¹⁴C）年代では、ブロック1の炭化物2点が3,290 ± 40yrBP、14,630 ± 50yrBP、ブロック3の炭化物2点が14,690 ± 70yrBP、12,740 ± 60yrBPとなっている。14,600～14,700yrBP前後の年代値がおそらく石器群の年代に対応するだろう。なお、報告によれば被熱石器は各ブロックから数点出土しているが、割合が極めて低いことから、炭化物の年代と石器群の同時性は完全に保証できる状況ではないと言える。

出土遺物は総数3,031点（総重量7,687.5g）である。各ブロックでは、細石刃製作を示す接合資料があり、一定数の細石刃と細石刃核が含まれている。表1に石器組成を示した。4つのブロックの石器組成は細部に違いはあるものの、細石刃100点ほどを中心に、数点ずつの各ツールで構成される内容であることから、比較的均質のブロック群によって、遺跡は構成されている。また、ブロック間の接合関係の存在から、それぞれが独立して存在していたのではなく、直接的な人の移動を含めた関係を窺うことができる。このような石器組成と点数から、オルイカ2遺跡は、人類活動が1箇所を繰り返し行われ、活動痕

跡が重複された場所ではなく、比較的シンプルな活動痕跡が分布を違えて残された場所であったと推察される。このような特徴は、ベースキャンプというよりも、短期的なキャンプサイトの様相に一致する。

黒曜石原産地分析の結果では、白滝（赤石山）産がほとんどであるが、置戸（所山）産や十勝三股産なども少数含まれている。いずれにしても、約 200km もの遠距離を運ばれてきた石器が主体であった。このような長距離移動と、オリカ 2 遺跡のようなキャンプサイトでの活動は、如何なる状況下で成し遂げられたのかが問題となろう。

（２）オリカ 2 遺跡をめぐる分析スケールの問題

北海道の細石刃石器群を考える際には、その時空間スケールを設定する必要がある。民族学的研究事例から抽出された狩猟採集民の活動傾向では、彼らが常に広大なテリトリーを利用することが一般的である。しかも、立地が異なる遺跡同士が一連の活動に組織されることも多く、ビンフォード（Binford1983）はそれを遺跡複合（site complex）と呼んでいる。そのような個々の遺跡を結び付ける何らかの手段が必要である。一般に、狩猟採集民は、装備の安定したセットを供給するために、広大な地域を一定の周期で利用する。1年のサイクルの中で理解するならば、毎年繰り返し利用されるような場所（遺跡）は、最終的に、大変複雑な遺物分布を示し、1カ所の遺物量も膨大になる。さらに、日常的な行動領域における地域スケールでの土地利用とセトルメントパターンを理解するとともに、個々の遺跡での行動内容を明らかにする必要がある。つまり、一連の行動が遺跡群の全体の中で、あるいは個々の立地での行動群の中で理解されなければならない。それには遺跡形成過程の復元が不可欠である。

このような理解のもと、当該の細石刃石器群を理解するための時空間スケールを説明するならば、**図 1** のようになろう。時間スケールで言えば、当該細石刃石器群は、初期細石刃石器群から約 5,000 年が経過した時間的な段階（phase）に位置している。その時間帯の中でも幾つかの空間スケールに倍率を変えて、焦点を当てた分析が必要となる。大きな空間スケールでは、まずは北海道全域をカバーするような「①広領域」があげられる。これは、例えば、黒曜石産地分析によってオリカ 2 遺跡と白滝等の黒曜石産地を結び付けた空間のような、直径 200km 以上の範囲となる。さらに、オリカ 2 遺跡では頁

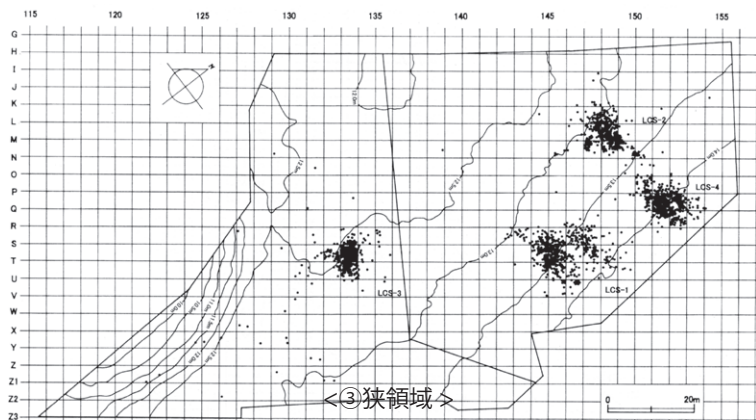
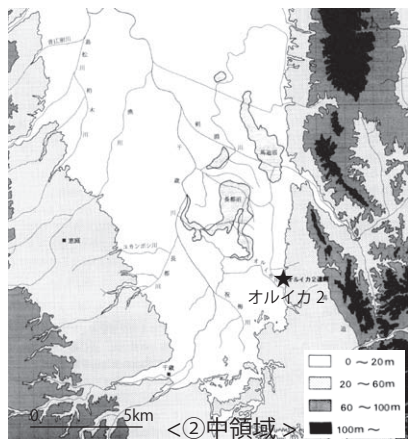
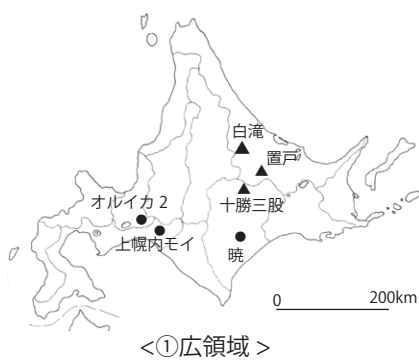
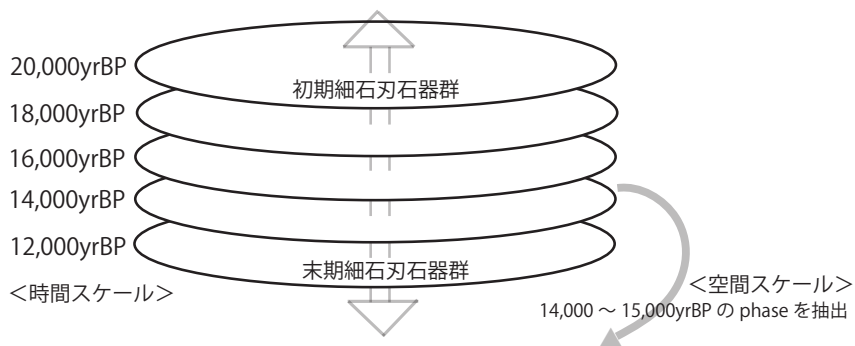


図1 北海道細石刃石器群における時空間スケール (三浦ほか 2005 に加筆)

岩等の他の石材もあり、黒曜石のみの産地分析では明らかにできない別ベクトルの動きも想定する必要がある。頁岩産地は道南に100kmも離れているため、これらが直接採集によるものだと仮定すると、さらに広域の活動領域を想定する必要がある。オルイカ2では主たる石材である黒曜石が石器材料の中心であり、頁岩製は僅かなツールに限られるため、行動のベクトルとしては、道南から道東の黒曜石原産地への東進、その後再び遺跡の頁岩産地まで至る西進の動きを端的に捉えることができる。当然ながら、頁岩製石器が交換でもたらされた可能性も考慮しておく必要がある。

続いて、より狭い地域スケールでみれば、千歳市を含む勇払平野のような直径50kmほどの「②中領域」が想定できる。大きな地形的境界によって制約を受ける地域であり、この範囲の当該細石刃石器群には、厚真町の上幌内モイ遺跡があげられる。上幌内モイ遺跡の内容は、オルイカ2遺跡に類似しており、この中領域では、同様な活動が地点を変えて行われていた可能性を想定する必要もあろう。また、遺跡立地で言えば、オルイカ2遺跡は北西に広がる低湿地に面しており、そのような沼地や氾濫原での狩猟活動を想定する必要がある。おそらくはオルイカ2遺跡での日常的な活動と関わる領域であり、遺跡の性格を考える上で重要である。

さらに小さいスケールになると、「③狭領域（遺跡領域）」が該当する。同一時期に石器ブロックが残された空間であり、オルイカ2遺跡では、直径80m程の範囲になる。ここでは、石器の接合関係から、ある程度の同時性が保障されている。狭領域内で場所を変えて、大きく分けて4ヶ所のブロックが形成されているのには、何らかの要因があったのだろう。

ここでは、前提として、時空間スケールの幾つかのステージを提示した。しかしながら、当該集団の中で、詳細な時空間領域の解析には、発掘された遺跡数が少なく、データにも制限があるために限界がある。現状ではメッシュの粗い解析しかできないため、本論では、狭領域（遺跡内）での活動について、詳細に検討したい。その中で石器の機能研究が果たす役割は、遺跡内活動の多様性を語る上でも大きい。

3 使用痕分析

(1) 使用痕分析の方法と分類基準

使用痕分析では、落射照明付き金属顕微鏡（オリンパスBH）で観察をおこ

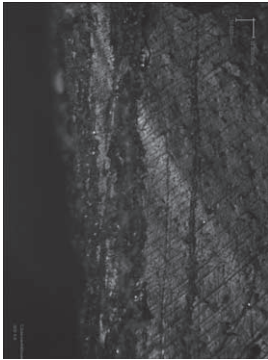
なった。観察倍率は、100倍、200倍、400倍である。本論の分析対象は黒曜石製が多く、その他に頁岩や珪岩などの堆積岩系が含まれる。使用痕光沢面（ポリッシュ：use-wear polish）が確認されたのは、頁岩製と珪岩製のみであったため、ポリッシュの分類基準は、東北大学使用痕研究チームによる実験研究（梶原・阿子島 1981）と、筆者が実施した実験（鹿又 2002、2012）に基づいている。線状痕の方向は、隣接する縁辺に対する傾きによって「平行、斜行、直交」と記載した。顕微鏡写真は USB カメラを用いて撮影した。

（2）細石刃の使用痕

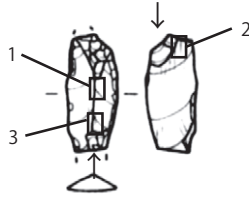
発掘調査報告書によれば、細石刃については、肉眼観察ながら、線状痕が確認されている（佐川ほか前掲、三浦ほか前掲）。線状痕のある細石刃は、ブロック 1 から 3 点、ブロック 2、ブロック 4、ブロック 外から各 1 点が出土したと報告されている。また、背面の右側辺を中心に、二次加工を施されたものが一定数含まれていることも特徴である。このような二次加工ある細石刃は、ブロック 1 から 4 点、ブロック 3 と 4 から各 2 点、ブロック 2 から 1 点、ブロック 外から 1 点が出土した。特定のブロックに集中することなく、各ブロックから等しく出土している状況である。細石刃は黒曜石を材料としており、以下の分析対象も全て黒曜石製である。

本論では、ブロック 1 から出土した細石刃について、肉眼観察をおこない、線状痕が観察された 4 点について、金属顕微鏡で詳細に観察・記録した（**図 2**）。VI -10-32（報告書の図 No.）では、背面中央の稜線付近と（図 2-1、2-3）、腹面基部側のバルブ付近に（図 2-2）、平行の線状痕が認められた。背面側の線状痕は細石刃を縦断するように長くのびる。細石刃の稜線は潰れ、粗い表面となっている。線状痕の中には連続する C 字状のものがみとめられるが、その特徴から、対象物が細石刃の先端部側から基部側に向かって動いた結果、線状痕が生じたことが推測できる。背面右側縁には二次加工がみられるが、背面左側辺と、腹面右側辺には微小剥離痕が認められる。また、背面の折面側と腹面基部の左側には、衝撃剥離痕と思われる長軸方向の大きめの剥離痕（図 2 の→）がある。

VI -10-33 には、背面の中央左側の稜を中心に、平行の線状痕が認められる（図 2-4）。この部位が最も突出した部分であり、線状痕が生じやすかったものと予想される。この細石刃にも背面右側辺に二次加工が認められる。細石刃の



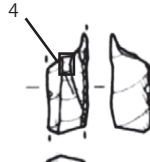
1 稜線付近の平行の線状痕



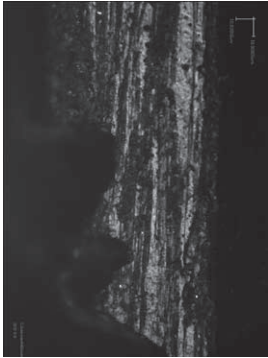
VI-10-32



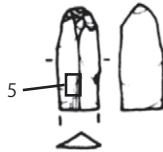
2 バルブ上の平行の線状痕



VI-10-33



3 稜線付近の平行の線状痕



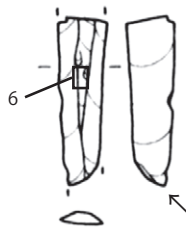
VI-10-35



4 稜線付近の平行の線状痕



5 稜線付近の平行の線状痕



VI-10-47

Scale=100%



6 稜線付近の平行の線状痕

図2 オルイカ 2 遺跡出土細石刃の使用痕 すべて 100 倍で撮影

上下は折損しており、基部側は捩じり折れたような状態である。

VI-10-35では、背面の中央の稜線の左側に、平行の線状痕が認められる(図2-5)。背面の右側辺には連続的な微小剥離痕もあり、被加工物との接触の可能性を示している。

VI-10-47では、背面の中央に、平行の線状痕が認められる(図2-6)。稜線付近は粗い表面となっている。この細石刃の腹面右側縁に沿って、細かい二次加工がみられる。末端部の腹面側には、末端右から左に斜めに抜ける衝撃剥離痕がみられる。

以上、ブロック1から出土した細石刃4点には肉眼でも観察可能な線状痕がみられた。顕微鏡下でも、密集する線状痕が、細石刃の背面の稜線付近や腹面のバルブ付近に認められ、使用痕であると推定される。ただし、この線状痕がある位置が、被加工物と接した場所であるのか、柄との接触範囲であるのかは、断定するのは難しい。おそらく後者の可能性が高いだろう。このような線状痕は、湧別技法札滑型細石刃核から生産された細石刃に共通して確認されている(鹿又2004、2012aなど)。したがって、当該石器群における共通した着柄法あるいは使用法に由来する可能性があろう。

(3) 彫刻刀形石器の使用痕

オリカ2遺跡の彫刻刀形石器の特徴は、第一に小型品が多いことである。平均値で、長さ32.9mm、幅23mmである。本州の大消費遺跡である新潟県荒屋遺跡では、彫刻刀形石器のサイズが平均値で長さ39.6mm、幅21.7mmとなっており(鹿又2003)、オリカ2の彫刻刀形石器はさらに小型の範疇に含まれることが分かる。第二の特徴として、オリカ2遺跡では、彫刻刀形石器のほとんどが基部の両面を整形されることがあげられる。先述の荒屋遺跡では、基部両面の明瞭な整形は、わずか3.5%にしか認められない。このような基部を薄く尖らすような整形は、彫刻刀形石器の着柄に関連するものと予想されているが、小型化と着柄率の増加を示すデータは未だ十分には出されていない。着柄に関しては、本論の分析だけでは検討が不十分であり、実験データの蓄積を含めて、改めて検討する余地を残している。オリカ2遺跡出土の彫刻刀形石器のファシットと腹面のなす角度は、平均で90.8°であった。つまり、ほぼ垂直の刃角が作出されている。この刃部形状は、彫刻刀形石器の機能と結びつくものと予想される。

表2 オルイカ2遺跡出土彫刻刀形石器の使用痕分析結果

器種	ブロック	(北埋189、北埋221)図No.	石材	刃角	ポリッシュ	線状痕	発達度	ファシット位置	備考
彫刻刀形石器	1	VI-11-62	黒曜石	92.0	分析対象外				ファシットにラッカー塗布のため使用痕が不明
	1	VI-11-63	頁岩	100.0	D1	直交	中～弱		
	1	VI-11-64	頁岩	87.0	分析対象外				ファシットにラッカー塗布のため使用痕が不明
	1	VI-11-65	珪質頁岩	108.0	分析対象外				表面状態が悪く使用痕が不明
	1	VI-11-66	珪質頁岩	81.0	分析対象外				ファシットにラッカー塗布のため使用痕が不明
	4	VI-22-119	珪岩	113.0	-			左肩	パッチ状の光沢が点々
	4	VI-22-120	珪岩	93.3	E2	直交	弱	左肩	分布が狭い
	3	VI-22-121	珪岩	90.0	-			左肩	未使用
	外	VI-22-122	珪岩	80.0	D1	直交	弱	左肩	ラッカー塗布があるが、一部ファシット付近の使用痕が確認できる
	1	VI-22-123	珪岩	93.3	分析対象外			左肩	ラッカー塗布のため、ファシット付近の使用痕が不明
	3	VI-22-124	頁岩	90.7	分析対象外			左肩	ラッカー塗布のため、ファシット中央部の使用痕が不明
	4	VI-22-125	黒曜石	52.0	分析対象外			左肩	未使用か？被熱のクラックのため不鮮明
				70.0	分析対象外			右肩	未使用か？被熱のクラックのため不鮮明
	2	VI-22-126	黒曜石	85.0	-			左肩	未使用
				127.3	-			右肩	未使用

さて、本論では、オルイカ2遺跡出土の彫刻刀形石器13点を観察したが、うち6点にファシット付近にラッカーが塗布されており、刃部使用について、断定できない状況であった。しかし、うち1点には使用痕がラッカーの外に確認された。その他の資料では、ラッカー塗布範囲外には、使用痕光沢（ポリッシュ）が確認されなかった。また、そのほか2点は被熱のために、観察に適した表面状態ではなかった。さらに別の1点は、彫刻刀スポールとの接合状態であったため、観察できなかった。したがって、最終的には、珪岩製4点、黒曜石製1点、頁岩製1点の6点を分析対象とした。その中で微弱ながらも使用痕光沢が確認されたのは3点である（表2、図3）。

VI-22-120では、ファシットと腹面のなす縁辺に、E2タイプのポリッシュが認められた（図3-1、3-2）。線状痕は直交であり、凸部に摩滅を伴う。ポリッシュの広がり限定であり、使用の程度が低かったと考えられる。乾燥皮をなめす作業に軽度で使用されたと推定される。

VI-22-122には、ファシットと腹面のなす縁辺にパッチ状のポリッシュが点々とみとめられた。光沢は微弱であり、使用度も非常に低いものである。おそ

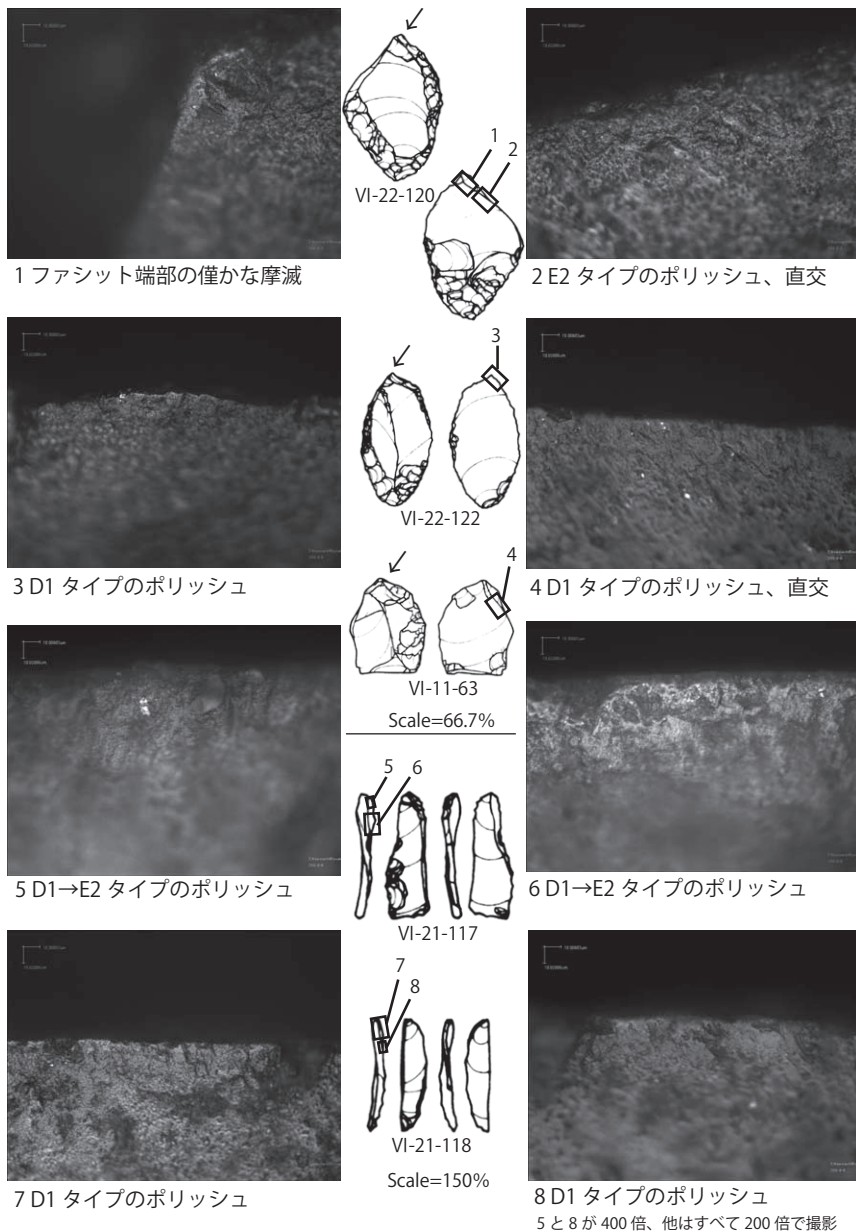


図3 オルイカ2遺跡出土の彫刻刀形石器と彫刻刀スボールの使用痕

らく D1 タイプのポリッシュの発達過程のものであろう (図 3-3)。凸部のみ部分的に発達している。骨角を削る作業に軽度で使用されたと推定される。

VI -11-63 では、ファシットと腹面のなす縁辺に沿って D1 タイプのポリッシュが帯状に確認された (図 3-4)。表面状態が悪いながらも、ポリッシュがある程度発達しているため、使用痕と判断できる。上述の 2 点に比べればポリッシュは明瞭である。線状痕は直交であり、骨角を削る作業に使用されたと推定される。

以上 3 点の使用痕のある彫刻刀形石器は、ブロック 1 から 1 点、ブロック 4 から 1 点、ブロック外から 1 点が出土している。いずれもポリッシュの発達は弱く、使用度は低かったと考えられる。

(4) 彫刻刀スポールの使用痕

彫刻刀スポールは 5 点を観察した。うち頁岩製 2 点に明瞭なポリッシュを確認した。VI -21-117 では、彫刻刀形石器のファシットと腹面のなす縁辺に、D1 タイプのポリッシュがパッチ状に確認される。それを覆うように、E2 タイプのポリッシュが、凸部を中心に広く認められた (図 3-5、3-6)。D1 タイプが発達した後、E2 タイプがその光沢を削り取りながら広がった状況と考えられる (鹿又 2002)。おそらく、骨角削りの後に、乾燥皮をなめす作業に使用されたと推定される。ある程度発達しており、一定の作業量を反映している。

VI -21-118 では、彫刻刀形石器のファシットと腹面のなす縁辺に、D1 タイプのポリッシュが認められた (図 3-7、3-8)。石器の表面状態は悪く、全体に光沢を帯びているが、ポリッシュの発達度が中程度であり、ポリッシュの判定は可能であった。縁辺に直交の線状痕を伴って、脂ぎった明るい雪解け状の光沢がみとめられる。骨角を削る作業に使用された石器であろう。

そのほか、ブロック 3 から出土した彫刻刀スポール 3 点では、彫刻刀形石器の腹面にあたる位置の中央に、平行な線状痕が共通して認められた。線状痕がファシット側の縁辺に多い訳では無く、通常の使用痕とは考えにくい。また、ポリッシュが発達しないため、使用によるものとは断定できなかったが、上記 2 点の使用方法とは異なる線状痕の成因を考慮する必要がある。

彫刻刀スポール 2 点に認められたポリッシュは、彫刻刀形石器のものよりも発達した状態であり、一定の使用後に、遺跡内で剥離 (刃部再生) されたものと考えて良いだろう。これら 2 点の彫刻刀形石器はブロック 4 から出土して

いる。各ブロック出土石器を限定的にしか分析できなかったため、ブロックごとの使用状況を理解するには至っていないが、少なくともブロック4では、石器を使用する一定量の作業があったと推定される。このブロック4は他のブロックよりも細石刃の出土数が多く、骨角加工もそれに連動して増えたのではないだろうか。皮なめしの使用痕もみられ、使用数は低いながらも複数種の作業があったと思われる。

4 母岩別資料と遺物分布、石器使用の関係

(1) 母岩別資料と器種別の分布

オルイカ2遺跡は、4つの遺物集中地点で構成されているが、それぞれの分布は1つの明瞭な集中地点となるシンプルなものである。また、接合関係や母岩別資料の整理も進められたため、個別の原石単位の活動を復元し易い状況である。それらの利点を活かし、遺物の詳細な空間情報を把握することで、人類行動のシナリオを再構築できる可能性がある。

まず、ブロックはそれぞれ10～20mの範囲に広がり、その中には複数の小さな石器分布の集中地点が認められる。つまり、各ブロック内ではそれぞれ近接しながらも僅かに位置を変えて複数の作業が行われていたと考えられる。なお、各ブロックでは石器が遺棄・廃棄された後に周氷河現象などによって二次的に移動している。特に等高線が密な部分では、等高線と直交となる斜面方向への拡散が認められることには注意する必要がある。

さて、器種別の分布をみると、いずれのブロックにおいても共通の傾向を見つけることが出来る。第一に、最も多く出土した細石刃は、およそ一つの集中地点を形成している。そして、その細石刃の分布範囲に一部重なりながらも、その周辺部に彫刻刀形石器や彫刻刀スポールが存在する。しかしながら、ブロック間の違いをあげれば、ブロック1では細石刃が散漫に分布しているのに対して、ブロック2～4では比較的まとまった集中地点を形成している。この点は、2度の発掘調査の精度の違いなどの問題もあるため、厳密な比較は難しい。

次に、母岩別資料では、各ブロックに幾つかの代表的な母岩が含まれていることが分かる。ブロック1には母岩10～12、18、19、21があり、主に剥片剥離とそれを素材にしたツールの製作がみられる。ブロック2では、母岩1で一定数の細石刃生産が見られ、母岩2で調整剥片の剥離とそれを素材にした

ツールの製作がみられる。ブロック3では、母岩5でまとまった細石刃生産が確認され、母岩6、7、13などで細石刃核の調整剥片の生産とそれを素材にしたツールの製作がみられる。ブロック4では、母岩9で一定数の細石刃の生産があり、その他でわずかながら石器製作を示す接合資料が確認されている。このようにブロックごとに見れば、細石刃をまとめて製作する母岩がブロック2～4で各1つ認められ、それ以外は調整剥片の剥離とツールの製作がみられる状況と読める。ブロック1でも約100点もの細石刃が出土しているため、一定の細石刃生産がその場であった可能性がある。そのように考えると、各ブロックは、石器製作の面では極めて均質な内容と言える。

(2) 使用された石器の出土位置

ブロック1では、彫刻刀形石器1点に骨角加工の使用痕が確認された。この石器は、ブロック南側の、細石刃が集中する場所で、かつ他のツールも比較的まとめて出土した場所に位置する。ブロック4では、細石刃が5×5mに比較的集中し、その周囲からツールが出土した。使用された彫刻刀スポール2点はその西側から、彫刻刀形石器1点はその東側から出土した。彫刻刀スポール1点には骨角加工と皮加工の使用痕が重複している。ブロック4では、細石刃を取り巻くような位置で、骨角を削る作業や、乾燥皮をなめす作業が行われたと推定される。

いずれのブロックにおいても、少数ながら線状痕の明瞭な細石刃が出土しており、それらが廃棄されている。一方で、細石刃を遺跡内で製作し、一部には二次加工を施す等の行為をおこなったことが接合資料の存在から窺える。このように考えれば、遺跡内で細石刃の脱着（取り換え）と、骨角器の修理（部分的な加工）などの作業があったものと推定される。骨角器を最初から製作するだけの作業量は、出土した道具の使用痕からは想定できない。

以上のような、4カ所のブロックが、均質な石器の製作と使用を示している点を、どのように理解するかが問題となる。遺跡が湿地に面した丘陵の裾部に位置する点などを考慮に入れると、湿地での狩猟活動が予想される。細石刃に残された線状痕や衝撃剥離痕は、狩猟具として使用された可能性を示唆している。狩猟活動で破損した細石刃を嵌め込んだ骨角器は、骨角器部分が修理され、細石刃は必要に応じて脱着されたと考えられる。細石刃の不足分は、細石刃核から剥離され、補充された。各ブロックにおいて細石刃が主として母

岩1つから剥離されている状況を見ると、細石刃の補給は各ブロックで1回限りだったのかもしれない。また、トールの不足分も調整剥片を利用して各ブロックで製作されて補われている。このような活動が、複数の集団または人物で行われたのか否かが問題となるが、いずれにせよ、同様な活動が地点を変えて行われたことによって、これらのブロック群が形成されたと推定される。

5 まとめ

オルイカ2遺跡は、出土石器の点数が約3,000点の中規模遺跡である。そして遠隔地石材がまとまって運び込まれていることから、当時の集団の遊動的活動の中で、この地が何らかの活動のために適した場所と判断されたのであろう。しかしながら、遺物の分布や活動痕跡の重複関係から推察される活動は、毎年繰り返し利用されるような拠点の遺跡では無く、一度限り、短期間利用された場所として位置付けられる。その意味で、キャンプサイトとして評価される。具体的な石器の製作と使用の活動を復元すると、狩猟活動による組み合わせ式道具（細石刃＋骨角器）の消費と、それに伴う細石刃の補給、骨角器の修繕の作業がみられた。それは、本遺跡の立地とも関係し、遺跡西側に広がる低湿地での狩猟活動を彷彿させる。今回は、使用痕分析の対象が限られ、全体的な石器の使用状況までは復元できなかった。しかしながら、部分的ではあるものの、遺跡内で行われた石器使用の具体像を復元できたことは大きな意味がある。北海道の細石刃石器群においては、使用痕分析の実践例自体が数例であり、本論によってその不足を少し補えた。しかしながら、彫刻刀形石器の着柄法の問題や、細石刃の具体的な着柄、使用法の問題は、依然として残されており、継続的な分析によって、今後明らかにしていきたい。

本論は、平成24・25年度科学研究費（研究代表者：鹿又喜隆、課題番号：23720376）の研究成果の一部である。

謝辞

本論の執筆にあたり、北海道埋蔵文化財センターおよび同センターの藤井浩氏、鈴木宏行氏、直江康雄氏、坂本尚史氏には様々な御協力と御助言を賜った。東北大学大学院文学研究科考古学研究室の阿子島香教授、佐野勝宏助教、東北大学総合学術博物館の柳田俊雄教授には多くの御指導と御助言を賜った。

参考文献

- Binford, L.R. 1983 *In pursuit of the past*. Thames and Hudson
- 佐川俊一・和泉田毅・末光正卓・阿部明義・富永勝也 2003 『千歳市オリイカ 2 遺跡』
 (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 189 集
- 三浦正人・菊池慈人・阿部明義・広田良成 2005 『千歳市オリイカ 2 遺跡 (2)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 221 集
- 梶原洋・阿子島香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－(東北大学使用痕研究チームによる研究報告 その 2)」『考古学雑誌』67- 1 : 1-36
- 鹿又喜隆 2002 「重複する使用痕の実験研究－出土資料による分析方法の再構築にむけて－」『文化』66-1・2 : 57-76
- 鹿又喜隆 2003 「第 5 章 出土遺物の分析結果」『荒屋遺跡第 2・3 次発掘調査報告書』: 39-54、東北大学大学院文研究科考古学研究室・川口町教育委員会
- 鹿又喜隆 2004 「細石刃の装着法と使用法－荒屋遺跡・タチカルシュナイ第 V 遺跡 C 地点出土資料の分析から－」『考古学雑誌』88-4 pp.1-27
- 鹿又喜隆 2009 「福島県笹山原 No.27 遺跡の機能研究」『第 23 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』: 46-51
- 鹿又喜隆 2011 「細石刃集団による地点間の活動差」『東北文化研究室紀要』52 : 1-19
- 鹿又喜隆 2012 「石器使用痕光沢面の形成過程に関するトライボロジーによる理解」『文化』75-3・4 : 125-140
- 鹿又喜隆 2013a 「北海道・本州における細石刃石器群の石器使用行動の共通性とその含意－北海道曉遺跡第 1 地点における石器機能研究を中心に－」『日本考古学』第 35 号 pp.27-45
- 鹿又喜隆 2013b 「北海道における初期細石刃石器群の機能研究－千歳市柏台 1 遺跡出土石器の使用痕分析－」『旧石器研究』第 9 号 pp.27-41
- 高瀬克範 2008 「北海道勇払郡厚真町上幌内モイ遺跡旧石器地点出土石器の使用痕分析」『論集忍路子』II pp.49-62
- 堤隆 1997 「荒屋型彫刻刀形石器の機能推定－埼玉県白草遺跡の石器使用痕分析から－」『旧石器考古学』54 pp.17-36
- 藪下詩乃 2012 「彫器の刃部再生－美利河 1 遺跡 A 地点 I 石器群の事例から－」『使用痕研究会会報』12 : 7-9
- 山田 哲 2006 『北海道における細石刃石器群の研究』六一書房